

「お言葉どおり」

今、私たちが過ごしているアドベントと、冒険を意味するアドベンチャーは、どちらも英語であり、その語源はラテン語に遡ります。ラテン語と言うのは、もうほとんど使われていない言葉で、古代ローマに始まり、現代においてはカトリック教会や学術的な分野で用いられているものです。ラテン語にある「adventus (アドヴェントゥス)」が、共通の語源ですね。意味は「来ること、到来すること」となります。キリスト教におけるアドベントは、「主の到来を待ち望む」という意味で理解され、冒険を意味するアドベンチャーは「未知なる出来事への期待」という側面を持っています。私たちキリスト者は、このアドベントの期間、「主の到来を待ち望む」ことは、十分に出来ているかと思います。何回、何十回と、キリスト教人生の中で繰り返してきた年中行事ですね。一方で、ラテン語にまで遡って再確認されるところの「未知なる出来事への期待」という感覚を、私たちは、このアドベントの期間に持てているのでしょうか。なんとなく、クリスマスって嬉しい日なんだけど、毎年毎年いつも代わり映えせず、ちょっと食傷気味と言いますか、マンネリ感があると言いますか。牧師の語る説教も、年々、ネタが尽きて行き、「なんか、その話、前も聴いたな」みたいな感覚になることもあるかも知れません。事実、牧師の側は、「今年のアドベント、クリスマスの説教、何話そうか」と悩ましく考えあぐねている人が多いんじゃないかと思います。もちろん、開き直って、毎年同じ説教をすることも、「大事なことなので何度も言います」という観点から言えば有意義かも知れませんが……。個人的には、何か新しい「未知なる出来事」「まだ知らない福音」って無いかなと考えたくなってしまう。まあ、その結果、余りにも奇を衒った説教となってしまうのは本末転倒なので、気を付けていたいと思います。

なんて言う、牧師のクリスマス事情はさておき、一信仰者として、このアドベント、クリスマスを、どのような気持ちで過ごすのか、というテーマは重要です。去年と同じクリスマスで良いのか、どうか。神様の御子がお生まれになるということに、慣れてしまって良いのか、どうか。そもそも、私たちの神様は、高くて深い御心を持ったミステリアスな方であります。私たちの想像を超えて、御業を成し遂げられ、私たちの想いも及ばない方法で、私たちを恵みで満たしてくださる方です。そんな方のお子がお生まれになる。クリスマスに天から与えられる。そんな大事な時に「言うて、去年も一昨年も一緒だったよね」と思うのって、これは、なかなか失礼な態度であると言えるんじゃないでしょうか。ただお独りの救い主が、処女マリアさんによってお生まれになり、自分の子ではないイエス様を献身的に育てたヨセフさんがいて、私たちの知る福音の物語は始まりました。そこには、世界で初めて、とか、人生一度きり、とか、掛け替えない、とか、そういう歴史上における唯一無二の貴重な意味があったかと思います。私たちも、年中行事、毎年のことと受け止めつつ、でも、努めて「今年のクリスマスは、特別だ」という想いを忘れないように、「未知なる出来事への期待」を心に留めて過ごしていきたいと思います。

今日は、聞き慣れたクリスマスの福音の、でも、あまり気に留めることの少ない「未知なる部分」をちょっと覗いてみましましょうか。と言っても、今更「そんな話、初めて聴いたわ」とはならないと思いますが、ちょっと、クリスマスの輝きによって見過ごされ勝ちな、登場人物たちの心模様に焦点を当ててみたいと思います。

まずは、イエス様の父親となってヨセフさんについて。早速、不躰な指摘となります。ヨセフさんは、イエス様の本当の父親ではありません。イエス様は、神様の御子として聖霊の働きによってマリアさんの体に宿りました。そこには、生物学的な接触や、夫婦間の愛情表現はなく、ヨセフさんにとっては「御言葉を受け入れる以外に、イエス様が誰の子か信じる手立てはない」という状況

に置かれました。これは、男性の方がよく分かる感覚かも知れません。自らの身体に大きな負担を
伴いながら子どもを産む女性と、その女性を傍で励まし、支えるしかできない男性と、その子ども
の親になるという感覚の芽生えに違いが生じるのはあり得ることです。しっかりとした夫婦関係が
あれば、その感覚の芽生えの違いは、大きな問題にはならないでしょうけれど、このヨセフさんとマ
リアさんの場合、「受胎告知」という出来事を信じればこそ、一筋縄ではいかないヨセフさんの葛
藤があったことは容易に想像できます。さらに付け加えるなら、飼い葉桶の置かれた粗末な空間で、
ヨセフさんは、自分とは血縁の無い子を取り上げる、という色々な意味で大変な働きを担いました。
また、イエス様がお生まれになった後、マタイによる福音書によりますと、救い主誕生を恐れるヘ
ロデ王の手から逃れるために、この聖なる家族は、エジプトへ避難することになります。自分の子
ではない、神様の子どものために、ヨセフさんは住み慣れたナザレの町も、故郷であるベツレヘム
も離れて、遠く異国の地へと赴くのです。そこに一体、どれだけの覚悟と信仰があったのだろうか、
と改めて思い巡らせてみたいと思います。

そして、イエス様の母となったマリアさんについても、決して美談では終われない葛藤と不安が
あったかと思います。先ほど、女性と男性では「その子どもの親になるという感覚の芽生えに違い
が生じる」と言いましたが、妊娠出産という人間として、生物として、最も偉大で尊い営みに関し
て、明らかに女性の負担が大きいことは言うまでもありません。時に、この営みに関わる男性の立
場は、無責任であるとさえ言える場合もあります。何はなくとも、子を産むという大きな負担を強
いられたマリアさんです。いかに今と昔とで、結婚観や幸せの観念が異なっていたとしても、マリ
アさんなりに人生の見通しくらいは持ちたかったかと思います。結婚するにしても、その心の準備
や段取りや、子を持つにしても、その覚悟を整える時間を過ごすなど、一つ一つ順序に沿って思案
し、決断することくらいは、マリアさんにだって許されて然るべきだと言えます。しかし、マリア

さんは、それら基本中の基本である権利さえも奪われた形で、「受胎告知」を受けるのです。・・・

あまり、園長を務める牧師が、こういうことを言うべきではないと思いますが、はっきり言って、ページェントでも演じられるマリアさんは、決して特別に恵まれた役ではありません。むしろ、全ての役の中で、最も過酷な人生を背負わされた人物だと言えます。だから、私はひそかに、マリアさん役の子に対しては、「素敵だね、良かったね」という祝福ではなく、「大変なお役をありがとう」と感謝の思いを持っています。もちろん、幼稚園の子ども達に向けて詳らかに説明するような話題とは言えないので、そんな話は致しませんが、でも、マリアさんって、本当は「心が綺麗で優しい」と称賛されるのではなく「過酷な人生を受け入れて逞しい」と讃えられるべきだと私は感じます。

マリアさんは、自分の思い通りにならない人生を悲観せず、絶望せず、神様に全てを委ねることができた、凄い人なのです。私たちは、明日のことでさえ思い通りにならないければ、愚痴をこぼしてしまいます。神様の御心がある知りながら、自分の計画の成就を先に求めてしまいます。唐突過ぎる受胎告知を受けて「お言葉どおり、この身に成りますように」と、マリアさんは言いました。果たして、私たちは、日々の営みの中で、これほどの覚悟と委ねを、神様に対して示すことができるでしょうか。

イエス様の両親に定められた、ヨセフさんも、マリアさんも、文字通り人生を懸けて、主に身を献げる、献身することを決断しました。それは、まさに「冒険的決断」だったと言えるでしょう。予測可能ではなく、予定調和でもない。二人ともお互いの人生に、お互いの身体に何が起こるか把握できていない。でも、神様が仰るなら、それに委ねてみよう、信じてみよう、「お言葉どおり」に、「未知なる出来事への期待」を持ち続けてみよう、と。

確かに、私たちにとって、1週間後のクリスマスは、もう何回目、何十回目かのクリスマスです。当日に、天使の大群が現れたり、東の国から博士たちが訪ねて来たりすることもないと思います。

でも、もしかしたら、新しい変化が、嬉しい兆しを与えられるかも知れない。いや、逆に、困難の始まりか、試練の入り口かも知れない可能性もゼロじゃない。けれど、その冒険のような未来を、あえて思い描くことで、私たちは、より開かれた心で、クリスマスの驚きと喜びを知ることが出来るのではないのでしょうか。救い主がお生まれなった、世界に小さな光が灯った。その実感も決して大きくはないでしょう。でも、神様の「お言葉のとおり」、探してみるのです、見つけようと試みしてみるのです。神様がこの世界を愛して、特別なプレゼントを下さったんだ、という「お言葉」に触れて、訝しんでみたり、信じ切ることに躊躇いを憶えたりするとしても、「お言葉どおり、なりますように」と信じてみる、委ねてみる、そういう意味で冒険してみる、アドベント最後の1週間を過ごして参りましょう。そろそろ、世の子ども達は気にしているところでしょう、今年のサンタさんは、どんなプレゼントをくれるんだろうかって。その子どものような感覚を私たちも忘れずに。たとえサンタさんが来てくれそうになくても、神様に期待して、ワクワクしてクリスマスをお迎えしましょう。最後にお祈りを致します。

神様。今日も、私たちのために尊い安息日を、そして、クリスマスへ向けた期待と希望を与えてくださり、感謝致します。今日は、実際にあなたの導きのもとで生きたマリアとヨセフの気持ちに寄り添いながら、あなたを信じ、委ねることの大変さと大事さを学びました。どうか、神様、私たちはこの両親程には強く逞しくあることはできないとしても、あなたの御言葉を信じて生きることを通して、多くの驚きと喜びを感じることができるよう支え導いてください。何気ないクリスマスではなく、あなたの素晴らしい御業と御計画に気付き、賛美できる、そんな次週礼拝となりますように。そして、驚きの御子であるイエス様のお生まれを我が事として感謝することができますように。私たちの心を励まし、整えてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。